〔新勅撰和歌集十九雜〕題しらず　寂蓮法師

とくさかるきそのあさ衣袖ぬれてみがかぬ露も玉と置けり

〔新續古今和歌集十九誹諧歌〕とくさに露のおきたるを見て　三條院女藏人左近

しなののや木賊にをける露はみがける玉とみゆるなりけり

〔雨窓閑話〕觀世一代能の事井木賊刈の事

百性共申すは、我等事は信州のその原と申す所の土民に候、今日木賊刈の能興行有るよし承り及び、我等も木賊かる者共なれば、なぐさみながら見物して、〇中略心なき賤の我々ども、感心して、面白く侍る、去りながら只今遊ばされたる内、いで〳〵とくさからうよと申す所、鎌の御手、我等がしなれたるとは、聊替はりある故、申す事にて候といへば、觀世の曰く、それはいと面白き見咎めやうなり、いかにして汝等はかるかと尋ねければ、されば、とくさはむかふへ一刀切りにかり申し候に、今遊ばされたるを拜見いたし候へば、同じ所を前の方へ二刀にて、御かりなされ候を見申して候、あれにてはとくさはかられ申すまじく候と云ひければ、〇下略

〔毛吹草三〕信濃　曾原木賊

〔伊呂波字類抄都殖物附殖物具〕土筆ツクヽシ

〔運歩色葉集津〕土筆ツクヽシ

〔易林本節用集津草木〕天花菜ツクヽシ　土筆同

〔書言字考節用集六生植〕天花菜ツクヽシ　土筆同　天花菜フデツバナ又云土筆

〔藻鹽草八草〕土筆

筆つ花、異名也、春のやけ野にと云々、つくヽしともよめり、かた山のしづがこもりに生にけりすぎなまじりのつくヽしかな、さほひめのふでかとぞみる

つくヽし雪かき分る春のけしきは、

土筆